

三位一体主日・聖霊降臨後第1主日 ヨハネ3章1―16節

〔新共同訳〕

1 さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。2 ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなされるようなしるしを、だれも行いうることはできないからです。」3 イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」4 ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか。」5 イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。6 肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。7 『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。8 風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」9 するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。10 イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。11 はっきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。12 わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。13 天から降って来た者、すなわち人の子のほかに、天に上った者はだれもない。14 そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。15 それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

①文脈と構成

①ヨハネ福音書は、「独り子である神」と呼ぶ神学的序文（二1―18）で始まり、続いて、イエス・キリストに対する洗礼者ヨハネの証し、イエスと最初の弟子の出会いを描く（一19―51）。2章1節から12章50節は、「しるし」によって神の栄光を現すイエスの活動を述べる。カナの婚礼で水をぶどう酒に変えた奇跡は、その最初の「しるし」である。イエスは神殿の境内から商人を追い出し、イエスの行った「しるし」を見て、多くの人がイエスを信じるが、イエスは彼らを信用しない（二13―25）。そこにニコデモが登場する。

②ヨハネ3章1―15節は、「新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」ということをめぐって行われた、イエスとニコデモの対話である。続く16―21節は対話というよりは神学的な議論となっている。22―30節は出来事の描写に戻り、洗礼者ヨハネと彼の弟子たちの対話が述べられる。人々がイエスから「洗礼」を受けていると訴えるヨハネの弟子たちに対して、洗礼者ヨハネは「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」と答える。続く31―36節は16―21節と同じように、出来事の描写というよりは神学的な議論に戻る。

③ヨハネ3章のテーマは「新たに生まれる」「洗礼」ということであるが、出来事を描写する部分（三1―15と三22―30）と神学的な議論の部分（三16―21と三31―36）とから成り立っている。福音書記者ヨハネは前者の部分では既存の伝承を利用し、後者の部分では彼の信仰理解を書いていると言える。

② イエスとニコデモの対話

① ニコデモはヨハネ福音書の3章と7章と19章にだけ登場する人物である。7章でのニコデモは、ファリサイ派の同僚がイエスを調べもせずに否定したとき、「本人を尋問せずに判決を下すのは間違っている」と戒め、19章ではイエスの埋葬のために貴重な香料を大量に持参している。彼は夜になってイエスを訪ねているが、その目的ははっきりしない。イエスを試そうとしたのでもなく、何か具体的な質問をぶつけたのでもない。彼が「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ…」と語っているのはお世辞ではなく、イエスへの尊敬心の現れであり、イエスと親しく語り合いたいと願っているのだろう。しかし、イエスが「新たに生まれる」ことが必要であると語ることによって、ニコデモとの間にあるずれが明らかになる。

② 新たに生まれる

はつきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。

年をとった者が：もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。

⑦ 「新たに」と訳されたギリシア語はアノーセンであり、「もう一度」と訳されているのはデウテロンという別の語である。「アノーセン」には、「もう一度、新たに」の意味のほかに、「上から」という意味がある。文字通り空間的に「上から」を意味するが、「神から、天から」の意味にもなる（ヨハ19:11）。3章31節「上から来られる方は」の「上から」も「アノーセン」である。

③ 肉と霊

だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。
肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。

⑦ 聖書では「肉」という語は、「皮膚と骨の間の筋肉」を指すだけではなく、「体の部位を表す言葉は人間全体をも表せる」という人間観に従って、「はかなく消え去る肉のように、弱くはかない人間存在そのもの」をも表す。それは「神の助けを拒み、神と無関係に生きる人間存在」のことである。

① これに対し、「霊」と訳される Pneuma は、もともとは空気の移動を表す語であり、「息」とか「風」を意味する。イエスは風にたとえて、人知を超えた霊の働きを説く。この語は神から来て人間を変える力を表し、さらにそのような人間存在をも表すことができる。この力によって「肉」というあり方がはぎとられ、「霊」という生き方に招き入れられる。そこでイエスは、「命を与えるのは『霊』である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である」と教える（六63）。「新たに生まれる」とは、霊の働きが人間の理解を超えていることから始まる。

⑦ ニコデモがイエスの言葉をほとんど理解できなかったのは、律法の言葉に縛られて、霊の働きに身をゆだねることができなかったからかもしれない。ファリサイ派のように、律法を守りたい一心から細則を作り上げると、その文字面が気になって、それに捕らわれてしまう。こうして、律法を守るつもりが、かえって律法の本来の精神から外れた生き方になり、結局のところ、肉という生き方にはまり込んでゆく。人間の思いの中に生きるからである。

⑤ 何の役にも立たない「肉」というあり方から脱却するには、「水と霊とによって」新たに生

まれ、霊の導きの中で生きる「霊の人」にされねばならない、とイエスは教える。そのほかに、永遠の命を得る道はないからである。

③神は独り子を与えた

14 そして ように モーセが 蛇を上げた 荒れ野で、
そのように 上げられねばならない 人の子は、
15 ようにと 彼を信じる者がすべて 持つ 永遠のいのちを。

16 なぜなら それほどに 神は愛した 世を、
その結果 独り子を 彼は与えた、
ようにと 彼を信じる者がすべて 滅びない
むしろ 持つ 永遠のいのちを。

④ヨハネ共同体のイエス理解

⑦ 14 | 15節ではイエスを表す呼称は「人の子」である。14 | 15節では、民数記21章の故事を踏まえて、「人の子が上げられる」必然性を述べ、15節ではその目的が「信じる者が永遠のいのちを持つ」ことにあるとされる。

⑧ 16 | 18節では、イエスは「独り子」と呼ばれ、世に対する神の働きかけと人が取るべき態度が述べられる。神は「世を愛した」、「独り子を与えた」、「子を世に遣わした」が、それに対する人々の態度は「信じる」ということである。動詞「信じる」が18節になって三度も使われることに示されているように、神の働きかけがまずあり、それに人は応答する。

⑨ 16節以下では、イエスを遣わした神の視点から十字架の意味が語られてゆくが、これはイエス自身の言葉としては奇妙に思える。しかし、16 | 21節ではイエスを表す呼称が「人の子」から、「独り子」や「光」に変わっており、イエスを「独り子」とか「光」とみる見方は、ヨハネを中心とする共同体の特徴といえるから、16節以下ではこの共同体でのイエス理解が分かりやすく展開されているといえる。

⑩上げられる人の子（14 | 15節）

⑪ 民数記21章によると、荒れ野の旅で飢え渴き、神への不信をあらさまにするイスラエルの民に対して、神はその不信を一掃するために火の蛇を送った。蛇にかまれた民は自らの罪を認めて、モーセに執りなしを頼んだ。神の指示に従ってモーセが造り、旗竿の先に掲げた炎の蛇を見上げると、民は命を得ることができたといわれる。この出来事は、イエスが十字架に上げられる出来事とその意味をあらかじめ示す予型となっている。予型とは将来に生じる出来事（あるいは理念）をあらかじめ示すモデルのことである。荒れ野での故事に目を向ければ、人の子が「上げられる」という出来事の意味がいつそう明確になる。人の子が「上げられねばならなかった」のは、十字架の人の子（イエス）を仰いで信じる者が永遠のいのちを与えられるためである。永遠のいのちとは、神が罪の力を滅ぼし、愛と平和による支配を開始したことによってもたらされた「いのち」のことである。

⑫ モーセが掲げた「旗竿」とは、棒の先に小切れをつけたポールのことだが、この旗は二通りに用いられた。一つは神がイスラエルを懲らしめるために異邦の民を結集する場合であり（イザ五26）、もう一つは神の救いの力を異邦の民に示すためにイスラエルを結集させる場

合である（イザ一10―12）。いずれにせよ旗とは、神がその思いを人に知らせるしるしである。ヨハネはこの旗に十字架を重ねて見ている。かつて蛇を見上げて命を得た者もやがて死を迎えた。しかし、神は今やイエスを十字架に上げ、彼を通して尽きることのないのちへとすべての人を招く。こうして十字架は、一人も滅びることのないようにとの神の愛を示し、人々を救いへと結集させる旗となる。

◎神は世を愛した（16節）

⑦ 16節と18節には「独り子」という呼称があり、これによって16―18節が囲い込まれている。この小段落では「独り子」であるイエスを通して行動する神の視点から十字架の意味が説かれている。

⑧ 16節は二通りに訳すことができる。新共同訳のように「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」と訳せば、神の愛の深さが強調される。これに対して「神は独り子をお与えになった。これが、神が世を愛する愛し方であった」と訳すこともできる。ヨハネはこの両方の意味を含ませているのかもしれない。神は独り子を与える、という思いもよらない仕方でこの世に対する深い愛を示した。

⑨ このような神の愛の目指すところが16節後半で語られる。神が「世を愛した」ので、十字架があった。この愛はまず「世」に向けられている。この「世」とは、単に人の住む領域ではなく、「滅び」（16節）に向かい、「裁き」（17節）を免れない人類のことである。この「滅びる」（アポツリユーム）とは、「本来あるべき所から離れることによって滅びへと向かう」という意味である。そのような「世」であっても、神の愛から除外されはしない。むしろ、そのような世であるから、神はこれを「愛し」、「独り子を与え」（16節）、「子を世に遣わした」（17節）のである。16節の「愛した」、「与えた」とは歴史的な事実を表すアオリストという時制が用いられている。神は御子を遣わし、死に渡して、その愛を現した。神の無限の愛が歴史上に現実となったことが表されている。

⑩ 16節で「ように」と直訳した接続詞は、ある行為の目的や結果を表す接続詞である（15・17節も同様）。独り子を与えたのは、彼を信じる者が滅びずに、永遠のいのちを得る「ように」とであり、独り子を派遣したのは世を裁くためではなく、世が救われる「ように」とである。「ように」とを繰り返すことによって、世を捨てずに関わりを持つとする神が何を目指そうとしているのか、その目的を強調している。

⑪ 十字架はこの神の愛の旗印である。十字架に上げられたイエスはさらに天の父のもとへと上げられてゆく。こうして天から来たイエスは十字架を通して再び天へ帰ることによって、信じるすべての人を天の命へと引き上げる。この神の愛の旗印のもとにすべての「世」が招かれている。

④十字架に示された神の愛

十字架において、神は独り子の死を惜しまぬほどに人を愛し慈しむ方であることを知ることができる。人知を超えた神の愛を知るためには、霊の働きに身を委ねることが必要となる。神の力を必要せず、神との交わりを断つて生きる「肉」という生き方ではなく、風が「どこから来て、どこへ行くかを知らない」ように、人間の理解を超えた霊の働きを知って生きる者となることが求められている。十字架を仰ぎ見るとき、人は神の無限の愛を見つめることができる。そのとき、人は新たに生まれ、神の思いの中で生きる者へと変えられてゆく。